

ずっとついてくるもの、それは「山」だった。

～創り出される世界～

4/28(日) 13時頃撮影。阪神深江駅からすぐ東の踏切前にて。

踏切を待っている時、ふと後ろを振り返ると山があった。  
かなり海に近づいたはずなのに、山が視野の面積の多くを占  
めている。海と山との距離は、予想外に近かった。



東・西・南に移動しても北へと向けば必ずこちらを見ている。山が自ら動くことはない。語ることも、不満を言うこともない。だからなのか、そこで生活するものは常に、同じ面しか見えていない。実際、山を越えれば違う世界があるとは幼い頃、考えもしなかった。人と人との生活の境界を山は築いているが、境界を創り出し、世界を狭くしているのは自分自身だったようだ。

世界は広い。だが、ひとつの小さな空間が多大な存在感を示すこともある。何か惹きつけられるように迷い込んだ場所。思わず歩む足を止めてしまった。ただ、マンションの駐車場の一角に無造作に並べられていただけなのだが、なんとも不思議な空間だ。生活空間と溶け込んでいるために、面白みが一層増すのだろう。まだまだ現役で働けそうなモノばかり。必要時には駆り出されるのだろうが、今はリストラでもされてしまったのだろうか、お気の毒に。

～謎の集団～



4/28(日) 正午前に撮影。

神戸市営魚崎第三のマンションの敷地内。

ロープを張るための土台が空地いっぱいに広がっていた。

写真左の土台右後ろで草むらに白猫が横たわっている。



ひとつの空間に存在する物体が集団となり、objet（オブジェ）と化すこともあれば、ひとつの物体が objet となり、空間を創り出すこともある。赤い objet。それは、実用的なモノではなく、常に警戒音を発している象徴的存在のようだ。あたりまえの現実は、脆く覆される事実を知りながらも、黙して立っている。

～無言の警告～



東灘区内を歩いていると数多くの猫と遭遇した。そして、この空間（左の写真）にも猫がいる。赤い車の左上に寝そべっている白・茶・黒色で斑に染まった顔の猫だ。「はざま」を物質的にも精神的にも好んで生きているのは猫かもしれない。自由奔放に草むらや住宅の隙間にいる猫は何故かのんびりしている様に見えてしまう。命の砂時計の落ちる速さこちらの方が遅いの…。

4/28(日) 12時半頃撮影。青木の八坂神社前にて。

奥に見える赤い塔が、非常時に警報を鳴らし、危険を知らせる見張り台。

何もない平地の存在感は、どの空間をも超えた。それは、一番多く見かけた空間、空地だった。地震のせいで手放さざる負えなくなったか、それとも不況の余波かなのか。静かに誰かを待っているような淋しげな空間。そこで遊ぶ子どもの姿はなく、周りが時を進める中、じっと時の流れを止め、記憶として訴え続けている。

4/28(日) 16時頃に撮影。

魚崎中町の住宅街にて。

住宅と住宅に挟まれた30坪ほどの空地。

多くが草の生えた空地だったが、偲ぶように2本の木が植えられた精美な空地や建物の一部分が残り、異様な雰囲気漂う空地などもあった。

～過去の追憶～



私が課題の制作中、新たに発見したことは、実際に見た空間と写真によって創りだされた空間は異なるということだ。写真の中の世界が、もう動き出すことはなく、説明なしで「はざま」を感じ取ることは困難である。そして、「はざま」は二次元ではなく、三次元の世界にいるからこそ感じ取ることが出来るのだという、また、不可思議な「はざま」に出会ってしまった。